

審査を終えてやって来たロンドンのイーストエンドでのワークショップで未熟なダンサーたちに接しながら「東日本大地震」のニュースに接しました。…絶対的な悲愁、そして宇宙的郷愁。ダンスはいつでもカタチなき生命の、カタチとの攻めから、すでに崩壊するシルシとともに歩んでいる「不様なカタチ」を愛するものでもあれば、生成するカタチの「発見へのヌカヨロコビ」でもあるだろう。どこかで不定形な生命にとどめを刺さねばならないとする不遜で健気な努力は皆、すばらしい「破天荒なもの」となるはずであった。もはやダンスであるべきではないのだ。力不足というほかはあるまい。

いまだ位置の定まらぬ流動と移動、それがコンテンポラリーダンスならば既成のダンスの枠を踏み外してゆく意欲と力、それが評価の基準であり、11組を選出したときにすでに無理な注文には答えたつもりであった。すでに評価を得て将来的にも約束されたと思われるものよりは、いまだ覚束なく「なにか」に賞は行くべきであった。次に期待と希望を。

室伏 鴻 Paris 2011/03/15

少しずつ形を変えながら継続している横浜ダンスコレクション EX(通称「ダンコレ」)の作品部門(コンペティションⅠ)で、初めて審査員を務めさせていただいた。

本来、表現行為としての作品に、恐れ多くも採点を施し、選んで賞を与えるということ自体、大変難しく、矛盾を孕んだ行為だと思う。ただ同時に、国内外の多くのダンス関係者が指摘している通り、毎日のようにカラダを動かし作品を制作しても、多くの観客に見てもらう機会を自らつくるのがなかなか困難な状況下では、「ダンコレ」のような“場”が、作品を他者の視線に晒す貴重なプラットフォームとして一定の役割を果たしていることは間違いがないだろう。さらに今回の「ダンコレ」は、作品部門である「コンペティションⅠ」と、新人振付家部門と銘打たれた「コンペティションⅡ」の二つに分けて行われた最初の年でもあった。「ダンコレ」の存在意義をより確かなものにしていくためにも、そして何よりダンスの作り手にとっても、新たに EX と名付けた今回の事業目的がどれほど達成されたのかということについて、今回の結果と経験を踏まえ、是非検証分析をして未来に向かっていただきたいと切に願っている。

さて、今回の総評を簡単に記したいと思う。

正直に言って、今回実際に拝見した 11 の作品には、残念ながらどれひとつとして僕の心を深く揺さぶるものはなかった。結果として、採点評価も、5人の審査員の中では、僕の採点が最も厳しい採点であった。そして、その理由が、審査員や多くの他者の視線に晒されることによる演者の緊張や、様々な空間的・時間的・条件的条件からもたらされたというよりは、作り手である振付家やダンサーの創作そのものに起因していることが、とても気になった。表現行為として、作品を人前に晒すのであれば、少なくともそれを見る者との関係において、コミュニケーションや想像力が喚起されてほしい、と思う。さらに、それが身体表現という形をとって表現されれば、その身体と、身体を動かしせしめる意識／無意識を可視化し、舞台上で構築してほしい、とも思う。もう随分前のことになるが、演出家の故・寺山修司氏が執拗に指摘していた「内面への退行」が起きているのではないか。少し乱暴な言い方になってしまうかも知れないが、今回の作品の多くは、そうした「内面への退行」と取られても仕方のないような脆さがあったように思う。僕は「ナイーブな自己の内面」などには、正直あまり関心がない。それよりは、意識を有した身体の即物性に正面から向き合った、純粋な身体運動や、もしくは不純物だらけな身体運動としての“ダンス”を全身で浴びたいのだ。

もちろん、最優秀賞を受賞した振子びじんの「syzygy」は、初演時に比べると少しぎこちなさはあったものの、ひとつ頭の抜けた作品であった、と思う。また、竹内梓「Le Blanc」や鈴木アイリ「lishmoa」國本文平「The Son」高橋幸平「すばらしい世界」等、将来的にポテンシャルを感じさせる豊かな感性の発見もあった。作り手には厳しい言い方になるかも知れないが、いずれにせよ「これはもはやダンスではない。」といったきわきわの表現の可能性も含めて、よりいっそうの奮起を求めたい。ダンスには、まだまだ未知なる可能性が広がっていることは、踊っているあなた達こそ一番感じている筈なのだから…。

前田 圭蔵

映像のみで80作品を選考する一次審査にはかなりの葛藤があったが、たとえ不器用でもオリジナリティや伝えようという熱意が感じられる作品を選ぶよう心がけた結果、未知数の若手の作品が多く本選に残った。振子びじん、國本文平、竹内梓の受賞作は構成力や振付の新鮮さ、踊り手の存在感で光ったが、高橋幸平の尖った才気やソン・ミョンヒの完成度の高い表現など、他の作品も捨て難い魅力があり、決して圧倒的な差ではない。また、映像作品のような凝った演出が多く見られた前回に比べ、今回はふたたび生で動く身体そのものに立ち戻った作品が主流を占めたのも強く印象に残る。これは今後の傾向となるのか。参加者たちの展開にも注目してゆきたい。

新藤 弘子

2011年のダンスコレクションEXは、特に多くの発見に満ちた年でした。

私にとっては多くの日本のカンパニーが印象に残りましたし、会場に来ていた数多くのアジアやヨーロッパのプロフェッショナルの方々も、彼らの作品が日本国外で紹介されるよう、必ずや力を貸してくれることと思います。

若手振付家のための在日フランス大使館賞は、國本文平さんに授与されました。

選考の決め手となったのは、彼が打ち出すものの強さです。

彼の身体の動きと、舞台空間の使い方はミニマルでありながらも、まれに見る劇的な強さを生み出していました。

レベッカ・リー

若手振付家にとっての大切な鍵＝横浜ダンスコレクションは時代の中でその装いを替えながら16年目を迎えたが、今会期中、久しぶりに桜木町から赤レンガ倉庫までの汽車道を歩く。今はみなとみらい線があってもっと便利にアクセスできるが、以前はこの汽車道がメインルートであった。横浜ダンスコレクションEXコンペティションIでは、特に若手の活躍が印象に残る。選考メンバー、事務局スタッフの話し合いにより、映像選考から本選まで一貫して、振付家の新たなクリエイションに向かう意欲とオリジナリティに眼目が置かれ、次への鍵が渡されたように思う。身体と空間への独特なアプローチで注目される振子びじんさん、その独自性への大きな期待と奨励を込めての授賞となった。國本文平さんの静謐な強さ、竹内梓さんの独特な空気感、高橋幸平さんの構成力にも期待が大きく、今回出会った80作品の振付家が未来への作品創りに挑戦し続けてさらに明確なアイデンティティを示すことを心から願っている。クリエイションがアーティストにとっての営みであるとするれば、連綿としたこの営みを止めることのないように私達は全力を傾けていきたい。エアロウェーブをはじめ海外のフェスティバル、劇場、ダンス関係者がこれほど多数参加して若い振付家を見つめるダンスプロジェクトである。劇場は木を植え、フェスティバルは花束を贈るものだとすれば、横浜ダンスコレクションは時代に呼応して土を替えながらその両方で、アーティストの背中を押し支える大きな役目を担っている。

小野 晋司